歩みだした部落

―家計簿で農家経済の合理化へ―

■……球磨郡多良木町中原部落の記録……■

＊

主婦たちがそろつて家計簿をつけているという球磨郡多良木町の中原部落を訪ねた。

中原部落は総戸数四五（内農家が四二戸）で、大半が準水田地帯。従つて農家収入源といえば、米・煙草・麦・藁工品など。この部落の特徴は、昔から篤農家が多いということゝ、部落での物事がいつも和かに話合いで行われていることなどである。

篤農家といえば、こゝの部落会長の福田さんもそうだが、いわゆるきもいり役として部落会の世話やまとめ役に骨身を惜しまず立働いている。針馬さん一家もそうだ。奥さんのもり子さんは婦人会の支部長で、息子さんは青年団で活躍している。ところで、針馬さんの家では祖父の代から一つの家風のようにして営々と家計簿と日記を記帖しているが、これはかなりの評判になつている。この部落の主婦たちが家計に関心を持つようになつたのは、元はといえば、この針馬さん一家の影響からでもある。

話題の針馬さん一家……■

ここで少し、針馬さんの家庭をのぞいてみよう。そもそも針馬家で出納簿をつけるようになつた動機は、農家の暮しが目標なしでは進歩しないという信念からであつた。縁側にうず高く積まれた帖簿は昔ながら丹念に毎年々々締くゝりをつけてある。現在の針馬さんの代になつてからは、記帖の方法も近代的になつて支出と収入が明確に比較されている。

針馬さんにとつては、記帖は「日課の一つとしての楽しみ」となつて居り、出納簿をつけておけば、目標なしの無茶な支出がなくなるんです」と記帖の状況を細々と説明される。時々、収入と支出を締め出して見るそうだが、これは年間の計画性を確認するためにゼヒ大切なことらしい。例えば、六・七月の麦などの収入期、十一月の米の収入期、その他そ菜や藁工品の代金が一括入つた時など支出計画をさらに検討し、乱雑な支出を極力喰いとめるようにする。新しい土地や家畜を買うにも、欲しい動力機械を備えるのにも、すべて年間の計画で実行されている。

針馬家の出納簿の記帖は「ガラス張りですよ。家族みんなが家の財政に関心と責任をもつことが第一ですから」ということ。息子さんは、青年団の分団長で団の財政を担当して、堅実な腕をふるつているし、奥さんもやはり農協婦人部の貯蓄の世話を喜んで引受けている。

めざめた主婦たち……■

以上のような針馬さんの農家経営と結びついた家計簿の励行が、部落の主婦たちの関心を呼んだ。農協婦人部では、多良木町農協の指導員である中神さんに指導を頼み記帖の講習などを開いたりして急速にめざめてきた。

現在では、殆んどの家が家計簿を記帖して、主婦たちの経済観念も見違えるほどに変つてきた。以前はよく日用品の買物でも、物々交換をしていたのが、記帖をするようになつてからはその無神経さがハツキリわかつてきた。

一方日常の買物は婦人部でよく相談し合い、纒めて買えるものは一緒に購入するといつた方法もとられるようになつてきた。とにかく家の買物が計画性をもつようになつてからは、買物上手になり、無駄が省けるようになり、家計の運営も気分的にずいぶん楽になつたという。

伸びた農家経営……■

定期的に行われる町の農協婦人部の貯蓄コンクールで、いつも堅実に上位を保持しているのは、この部落の主婦たちだ。彼女たちの貯蓄源はいろいろあるが自分たちで作つたそ菜や玉子の代金、製材所のノコ屑を貰つて節約した燃料代、収穫期に主人たちから特別にプレゼントされる米・煙草代金の一部などだ。

この地区の生活改良普及員の吉村さんは「とにかく中原の人たちは、よく働くし、反面よく楽しんで居る。それに、雰囲気が和やかで何でもうまく話がまとまつている。こんなに主婦たちが家計簿の実行に関心を持ちだしたのも、そういつた話合いの基盤がしつかりとできていたからだと思う。又、主人たちの理解があるからでしよう」という意見。

又、多良木町農協の指導員の中神さんは「記帖指導のネライとして、わが家における年間の収入と支出をまず知ることが大切だが、同時に費目別支出の割合いなどを検討することで、経営の実態が明瞭になつてくるものだが、そういつた状況の上ではじめて経営の計画性も生まれ、合理化も進められて行くのだと思います。中原部落の場合、記帖を励行するようになつてからは経営状態は相当伸びてきているようです。」とその発展ぶりに驚いている。

× × ×

いわゆる篤農家の部落が、只の働きものという古いタイプからめざめて科学的な経営方式を生み出そうと部落みんなが話合つて歩み出した姿は、これからの農村生活の新しい一つの指針でもあろう。

―写真は中原部落の風景―（広報課）

あたゝかく育てよう

手足の不自由な子供たち

★……県下には八千名以上

「小児マヒ」や「先天性股関節脱臼」等の病気で手足の不自由な子供たちは全国に約四十万名、そのうち熊本県には八千名以上と推計されている。このような不幸な子供たちを皆んなで温く育てようと、只今（十一月十五日～十二月三十一日）全国一斉に「手足の不自由な子供を育てる運動」が展開されている。

そこで本県でも十一月一ぱい県内十二カ所で手足の不自由な子供の診断と相談の会を開いてきた。そのうちの一つ、矢部地区の相談会場をみてみよう。

★……大事な家族の愛情

今日の相談会場に当てられた矢部保健所支所の玄関には、足のふみ場もないように地下足袋や草鞋が並んでいる。受付の保健婦さんは、「十時からの受付だつたのですが、このありさまです。」と悲鳴をあげながら予診をとつている。

「では、私達も早速やりますか」と今日の相談相手の上野医師、竹本、藤井保健婦も予防衣に着換え、九時四〇分には相談が開始された。オイチニイ、オイチニイの掛声に合せて、保健婦さんに介抱されてビツコをひきながら一生懸命に歩行する子供。「ムスンデ、開いて、手をうつて…」と歌つて指をおらせたり開かせたり、上野医師も大変である。それを見守る付添いの家族も真剣そのもの。

一応検診が終つて医師のペン先がカルテの上を走ると、おど〳〵しながら家族がもらす言葉は異口同音に「先生、この子はよくなりましようか？」である。上野医師は「なおるでしようか？という前に貴方は親として、家族の一員として、つてこそ、その実も稔るのですよ。」と、付添の方の気持を打診している。

歩行練習……■

★……農村では病気は二のつぎ？

その隣室では、竹本保健婦がカルテを中心に白紙に図を書きながら熱の入つた説明をしている。相談しているお母さんは子供のことも心配だが、農作業の方がそれ以上に心配のようだつた。「あなたが手術するのではありません。可愛いお子さんの一生を台なしにしてもいゝのですか。麦と子供を一緒に考えてどうしますか。」それでも「そぎやんですネ、そるばつてん、麦播きがすまんと、どぎやんもしようがなかけんなア」となか〳〵話は進まない。農村では病気は二のつぎ、こういう考えがまだまだ根強くはびこつており、そのために愛児の将来に暗い影を投じている場合も多いようだ。

★……おじいさんの愛情

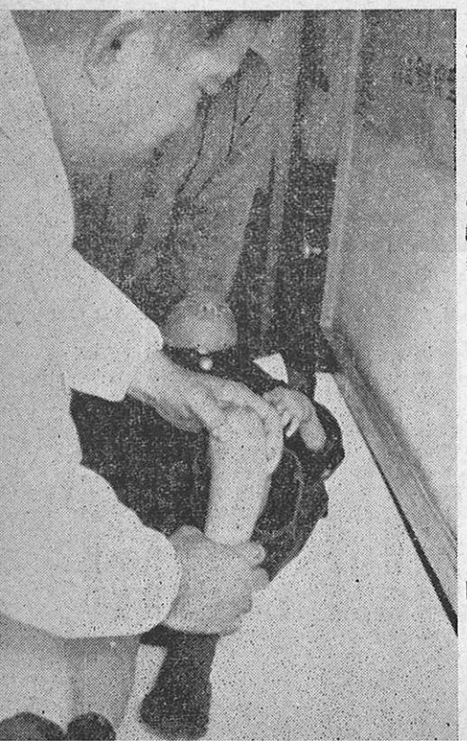
だが中にはこんなことがあつた。時刻は午後三時を過ぎて、そろ〳〵今日の後整理にかかろうとしていたとき、ひたいに大粒の汗をかいて、背中には七才ぐらいの女の子供をせおつたおじいさんがみえた。このおじいさんは清和村の人で二、三日前のラヂオで巡回相談を知り、はるばる山坂を越えて、三時間もかかつて辿りついたという。山の中なので、誰に相談することもできず、今日まで過してしまつていたらしい。

家では、少しのビツコは大きくなると自然よくなると軽視し、この話を家族に相談しても、農繁期においまくられて相手にしてくれないので、自分でせおつてきたということである。レントゲン検診の結果先天性股関節脱臼とわかつた。

おじいさんは家庭での育て方や「父母の会」の入会などについて熱心に聞いておられたが「この子は、からだはこぎやん不自由ばつてん、気は人一倍強かけんこるだけは、とりえですたい」と話される…。「健康」ということは、単に体が丈夫だということではなくて、肉体的に健康であると共に、精神的な健康があつてこそ、真の健康と云えるだろう。

手足の不自由な子供の精神的な健康までもこわさないように、私たちはこのおじいさんのように、温い愛情と根気で正しく育てなければならないのではないだろうか。

（衛生部）



不自由な足の診察……■